

教師の  
腕前診断文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立夏見台小学校)  
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

子どもの話には  
「答えず」に「応える」

子どもは自分の都合で教師に話しかけてきます。特に、教師が忙しい時ほど、そんな傾向があります。

教師は子どもの話にはちゃんと耳を貸さなければならぬことを充分にわかっているのですが、どうしても手を離せない時があります。

今回は、こんな時にはどのように対応すればいいのかということテーマにしました。

## 1 話しかけられた時の対応

連絡帳に返事を書いている途中で、「子どもが「先生！」と声をかけてきました。友達とトラブルがあり、叩かれたことを訴えたいようです。教師は、保護者への返事を、言葉を選びながら慎重に書いています。

子どもの話を聞くために、返事を書くことを止めてしまったら、せっかく浮かんでいる文言を忘れてしまいそうです。できれば、このまま書き続けたいというのが教師の本音です。

とりあえず、「うん？」と返事をして、話は聞こえているよというサインを送り、返事を書き続けます。

自分の思いを今すぐに聞いてほしい子どもは、「ねえ、先生ってば」と、肩をゆすつてきます。

Q1  
子どもにどんな返事をしますか。

- ① ハイ、なぐに？
- ② 今忙しいから、後で聞くから。
- ③ 1分だけ待って。

①のように返事を書くことを止めて、子どもの話を聞いてやるのが理想です。

しかし、連絡帳は下校時までには子どもへ返却しなければなりません。後で返そうと思うと渡し忘れることがあります。

渡し忘れるのはまだいいほうです。返事の続きを書くことをすっかり忘れてしまうと、放課後に慌てて書くことになります。その上に、「あれ？ 何を書くんだっけ」と、書きたかったことを忘れてしまいます。

これにより、教師にストレスがたまります。その結果、「話しかけられなければこんなことにならなかった」と子どもに責任転嫁し、子どもの話を聞いたことを後悔してしまいます。

②なら、返事を書き終えることができます。子どもにとつての「後で」は、教師が連絡帳に返事を書き終える時です。子どもはその場で待っています。

待っていると、子どもは「先生、まだですか」と催促し始めます。何度もそんなことを言われると、先生はイラつき、「後でと言ったでしょう！」と声を荒らげてしまいます。子どもは悲しげな顔をして、席に戻っていきます。

子どもは先生に話しかけても無駄だと諦めの気持ちを抱き、その代償として、教師は信頼を失うことになります。

そもそも多くの人は、「後で」と言ったことを、本当に後でやることは少ないものです。「後で」は「やらない」と同じなのです。

しばらくして、「アッ、そうだ。子どもから話しかけられたんだ」と思い出し、子どもに歩み寄り、困り事をすっきり解決した子どもから、「もういいの」と冷たくあしらわれることになります。

私なら、③のように「1分待って」とお願いします。子どもは時計の秒針を見て、正確に1分をカウントします。

教師にとつての「1分」は「切りがよいところで終える」という意味です。一文の途中なら、それを完結します。返事が長くなりそうなら、大事な文言をメモします。実際にはペンを置くまでに1分を要しません。

教師が「1分」と言うことで、子どもは待つ目安ができます。「1分待てば、先生は話を聞いてくれる。だから、仕事を邪魔せずに1分待とう」という安心感を持ち、待つことができます。実は、この「1分」には、子どもの心を落ち着かせる効果もあります。

子どもは友達とのトラブルで話を聞いてほしかったわけですが、教師のところに来た時は興奮状態でした。

それが、1分待つことで、自分の頭を冷やすすきつかけを得ます。トラブルになった原因を考え、どうしたらよかったのかということが頭に浮かびます。待っている1分の間に、冷静さを取り戻すのです。

教師は切りがよいところで連絡帳に返事を書くことを止め、「はい、返事は終わり。待っていて偉いね。これからはあなたの話を聞きますよ」と子どもと向き合います。

子どもは1分もしないうちに教師が話を聞いてくれることが嬉しく、「もういいの？ 1分経っていないよ」と教師に感謝します。

ほめられた子どもはいい気持ちになれます。

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？

子どもは自分から当たっても、叩かれたと思うものです。「ねえ、ねえ」と肩をポンとされた程度でも「叩かれた」と大げさに言います。非は全て相手にあります。自分はいつも正しいのです。

大方の先生が「①」と「②」のように、相手に事情を聞き、どちらが正しくて、どちらが間違っているのかという白黒をつける指導をしているのではないのでしょうか。

相手を呼び、両者を同席させ、叩いた事実と原因を確認します。子どもだなぁと思うのは、「昨日、〇〇されたから」と言うのです。昨日の仕返しを今日されても、やられた方は心当たりがなく、「叩かれた」と被害者意識をもつのは当然です。

Q2

子どもの訴えを聞いた後、どう行動しますか。

- ① 叩いた友達に事情を聞く。
- ② どちらが正しくて、どちらが間違っているかの白黒をつける。
- ③ 子どもの気持ちを聞くことに専念する。

それが子どもの心の怒りの火を消すことに役立ちます。

2 「答える」のではなく、「応える」

子どもの話を聞くと、「友達が授業中に後ろを向いて話しかけてきたので『前を向いて』と肩を押したら、叩かれた」と訴えます。

子どもは互いに自分が正しいと思いい、非を認めません。トラブルを解決するはずが、火に油を注ぐ結果になります。

そして、両者に不満を残したまま、この後の時間を過ごすこととなります。

私は「③」のような対応をします。

子どもの不満は吐き出すことで収まることが多いものです。教師は、子どもが話し終わるまで、しっかりと話を聞きます。

子どもの話を聞く時、セクハラと誤解されない程度に、肩をポンポンと叩きながら聞くと子どもは落ち着きます。

スキンシップを取ると、脳からオキシトシンという「癒しホルモン」が分泌されます。オキシトシンは信頼する気持ちを強めたり、恐怖心や怒りを軽くしたりしてくれます。

逆に、オキシトシンが不足していると、自信がもてず、不安感や喪失感に襲われ、信頼関係が失われがちになります。

スキンシップの中でも、「だっこ」「おんぶ」は効果的だといわれています。低学年なら教師の膝の上に乗せて話を聞くのもいいでしょう。高学年は「肩ポン」や「ハイタッチ」がいいかもしれません。

教師とスキンシップを取りながら不満をぶつけることで、子どもは自分が受け入れられ、大切にされていると感じ、気持ちが安定します。不思議なもので、安心した空間で不満をぶちまけると、それがだんだん消えて行き、すっきりした気分になります。

話の途中、授業開始のチャイムが鳴りました。「続きは次の休み時間にしよう」と教師が言う



と、「もういい。大丈夫」と席に戻ります。

子どもは、トラブルを解決してほしいと願っているわけではありません。自分のつらい気持ちを聞いてほしいのです。知ってもらいたいです。そして、「つらいね」と教師に言ってもらいたいです。

そうすることで、子どもは自分のつらさを受け取ってもらえ、心が軽くなります。

子どもが教師に求めているのはトラブルを解決する「答え」ではなく、不満な気持ちに「応え」てもらいたいことです。

教師が子どもの気持ちに「応える」ことで、子どもは、相手を許せるようになります。許すというのは、忘れるということです。だから、「もう大丈夫」という言葉が出るのです。

教師は子どもの訴えに「答え」を出すのではなく、「応え」てあげればよいのです。